

猪の話（四話）      = = =      三州横山話より

昔の猪と今の猪

猪も明治三七、八年頃には、ほとんど出なくなって、猪の害というものを聞かなくなりましたが、それもほんの僅かな期間で、明治四〇年頃から、再び出始めた猪は、古老の話によると、四、五〇年来なかったというほど出るようになって、畑の甘藷を掘ったり、軒端に積んでおいた稲を食べたなどと言いました。それにその頃出る猪は、性質なども昔とは一変したように、出る場所は大概決まっていたものが、ほとんど想像もつかぬところへ出たり、また、幅が四尺以上もある人間の道路などは、決して横切らなかったものが、そんなことは平気で、涉って歩いて出るところがさっぱり見当がつかないと言います。

昔の猪は夜の間、田や畑を荒らして、昼間は附近の山の中に寝ていたもので、女が芝刈りに山に行ったら、猪がボロー（雑草や蔓草などが乱れ茂ったところ）に躰をかいて寝ていたとか、男が日が暮れてから山に仕事をしていたら、猪が子供を連れてそこへ出かけて来たのに、びっくりして逃げて来たなどというはなしもありました。近来の猪は、遠く一〇里も一五里もの奥山から、峯伝いに来て、夜が明けぬ間に帰ってしまうので、昔のように、撃つことが出来ないと、獵師が話しました。

猪も毎年少なくなっていくと言いますが、現今でも時々出て、なかなか油断はならないと言います。

シシのイ（猪の胆）

シシのイは、人間の体に、非常な効能のあるものと言って、貴重なものとされてきました。瀕死の病人などでも、これを飲んで回復しないのは、よくよく寿命がないものだと言っていました。獵師の家には、いつでも貯えてありましたが、普通の家でも大切に保存している家がありました。私の家などでも、シシのイや油を、昔は獵師の家から歳暮に貰ったものだそうです。

猪の牙

猪の牙は魔除けになると言って、大切に蔵ってある家がありました。

猪と鹿

猪はどんな急所を撃っても、決して一度では斃れぬと言いますが、鹿の方は、屏風を倒すように、見事に倒れると言います。また、手負い猪は次第に山深く遁げ入り、手負い鹿は、だんだん里近く、水のある所へ出て来るものと言います。